

《第9回国際日本学シンポジウム報告5》

## 誰が日本美術史をつくったのか？

—明治初期における旅と収集と書き物—

鈴木 廣之\*

### はじめに一問題の所在—

「日本美術史」は、いつ誰によって、どのようにつくられたのだろうか？ 従来「日本美術史」の形成史の問題は思想や歴史観の問題として捉えられてきた。そのため、先行する思想や著述のなかに「日本美術史」の萌芽や起源を求めることにもっぱら関心が向けられた。しかしながら、北澤憲昭が『眼の神殿—「美術」受容史ノート—』（美術出版社、1989）のなかで論じたように、「美術」は西洋近代の制度として明治期に受容されたという前提に立てば、「日本美術史」もまた明治近代の所産として捉えられる（と同時に、日本美術史の「日本」という枠組が近代の国民国家のそれであることも当然、問題化されるべきだ）。したがって「日本美術史」の形成史の問題もまた起源論とは別個のパースペクティブをもつことになろう。

ここでは問題をできるだけ具体的に考えるため、例として法隆寺金堂の壁画をとりあげ、金堂壁画がいつ誰によって、どのように「発見」されたのか検討し、この壁画が「美術」として認知される起点を求めたい。この壁画は「日本美術史」の最重要作品のひとつとして評価されてきた。戦後1949年の、模写作業中の壁画焼失事件がきっかけとなって現在の美術史学会が、東西で期せずして組織されたことは、金堂壁画が美術史のなかでもつ象徴的な位置をよく物語っている。

### 1. 日本美術史形成の歴史的条件

#### (1) 1870・80年代の収集と研究

1870年代に日本美術を論じた書物が欧米で登場する。背景には1862年のロンドン万博、67年のパリ万博、73年のウィーン万博に展示された日本製品の評判に促されたコレクターの誕生があった。1880年代になると、1882年のクリストファー・ドレッサー『日本、その建築、美術および美術工芸』、83年のレイ・ゴンス『日本美術』、85年のエドワード・モース『日本の住まい』、86年のウィリアム・アンダーソン『日本の絵画芸術』など、本格的な著作が相次いで刊行された<sup>1</sup>。1880年代の4人の著者のうち、ドレッサー、モース、アンダーソンはいずれも一定期間ないし長期の日本滞在経験をもつ。80年代の著述が登場する背景には著者の実体験があった。日本美術史の形成過程を考える本稿がとりわけ注目するのは、彼らの滞日経験だ。

なかでもウィリアム・アンダーソンには1886年の著作に先行する「日本美術の歴史」がある。論文は1879年（明治12）6月17日火曜、午後4時から東京・虎ノ門の工部大学校で開かれた日本アジア協会の会合で口頭発表され、次いで同協会の機関誌『日本アジア協会紀要』に掲載された<sup>2</sup>。後年の著作『大英博物館日中絵画目録』の序文で「日本の絵画芸術の歴史における主要な事実を収集記録した最も早い試みであったと信ず」とアンダーソン自身が述べたとおり<sup>3</sup>、内容が絵画の歴史に限られたとはいえ、この論文は日本美術の本格的

\*東京学芸大学 教育学部 美術・書道講座 教授

な歴史叙述を行なった最初期例だった。

よく知られるように、幕末から明治初期にさまざまな公的機関が欧米から専門家を招聘した。一般に、断片的で偶然的な知識で満足しなくてはならない旅行者の場合とちがい、長期滞在者の日常生活に根差した経験から得られた知識のほうがずっと正確で、判断にも信頼が置ける。実際、1870年代後半から80年代の日本美術の重要な研究は、本国で構想されたものではなく、現地の経験に基づいて進められた。1873年（明治6）10月に来日したアンダーソンと、78年8月に初来日したアーネスト・フェノロサは、その代表的な実践者だ。パリの日本人の知識を土台にした1883年のルイ・ゴンズ『日本美術』を、フェノロサが『ジャパン・ウィークリー・メール』1884年7月12日号の書評で酷評したのは、この意味で象徴的だ<sup>4</sup>。

1870年代から80年代はまた、日本美術の本格的なコレクション形成の端緒の時期にあたる。この時期に日本美術の研究を志した者は、まず研究対象を自力で探し出すことから始めなければならなかった。1879年6月17日に工部大学校で行なわれたアンダーソンの「日本美術の歴史」の発表のようすは、勝海舟の子供、梅太郎の妻だったクララ・ホイットニーの日記からわかるが、彼女の証言によれば、この日「ホールには有名な画家のありとあらゆる掛物がかかっていた」という<sup>5</sup>。これらの展示品はアンダーソン自身の収集品だったとみるべきだろう。よく知られるように、初期の研究家であるアンダーソン、モース、フェノロサは一大コレクションを形成し、大英博物館やボストン美術館の日本美術コレクションの基礎をつくった。

開国から維新前後の経済と社会の混乱期は、収集家に有利な状況をつくりだした。斎藤月岑の『武江年表』は慶応4年（1868）8月の条に「此の頃世に行はるゝもの」という一項を掲げ、その筆頭に「骨董屋」をあげた<sup>6</sup>。幕末維新の混乱は

家財や家産とともに多くの収集品を武家の蔵から流出させ、それらの品物が骨董商の店先を賑わせたことだろう。また、明治政府の神仏分離令は寺院の経済を破壊し、これに端を発した廃仏毀釈の風潮下でおびたしい数の寺宝が失われた。このような社会状況は、無数の品物を市場に連れ出すことになった。

基本的、専門的な知識の蓄積がほとんどない時期に本格的な日本美術研究に取り組んだ第1世代にとって、研究と収集は表裏一体にならざるをえなかった。しかも幸運なことに、絶好の収集の機会を保証する経済的状況があった。このような特殊事情は、本国の同朋にくらべ、彼ら現地生活者の立場を決定的に有利なものにした。

しかし彼らにも悩ましい問題があった。玉石の混淆する真贋の森に迷い込んだ彼らにとって頼りになるコンパスは、個々の対象物の品質を見きわめ、優れた美術品を選びわける眼力だった。だが現地人を当てにせず、自力でこれを身に付けるには自ずと限界があった。そこで彼らが行なったことは、既存の知識と資源を動員して収集品の背後にある歴史を探究し、これを参照しながら、客観的な価値判断の基準となり、かつ個々の品物の質を見きわめることのできる普遍的な尺度をつくることだった。運任せや行き当たりばったりでなく、効率的な収集を行なうためには、それが必要だった。

まったくの回り道だが、ほとんどなにもない時期にはこのような困難な道を選択するほかなかった。だが彼らには、基本を押さえた強みがあった。収集品が体系的に整理されるにつれ、当初は大雑把に見えた歴史も細部が補強された。それによって価値判断の基準となる尺度の信頼性が増すと、選りすぐりの品物を効率的に収集できるようになり、事態は加速度的に好転した。

収集品の体系的な整理作業のなかから必然的に、ひとつの歴史観が生まれた。このようにして日本美術史が芽吹き始めるのだが、それは彼らの純粹

な学問的興味や情熱から生まれたというより、効率的な収集を可能にする確固たる拠り所を求める、彼ら一流の実利的な要請から構想されたと考えるほうが、はるかに実態に近かったというべきだろう。

## (2) 国内旅行と経験の拡大

このように収集と研究、そして美術史の構想が分ちがちに結びついたので、1870年代末から80年代の状況だった。これら一連の行為を効率的に実行するためには、偽物を掴まされることを覚悟しなければならない「骨董屋」は必ずしも信頼の置ける相手ではなかった。収集も研究も努力を惜しまず、文字どおり自分の足で稼ぐことが成功の鍵を握った。現地生活者としての利点を活かすためには、彼らの活動の源泉となる経験の拡大が是非とも必要だった。

なにも美術への関心に限ったことではないが、この時期、というよりも幕末維新以来ずっと、彼ら現地生活者の多くが知識欲と好奇心から関心を寄せ、望んだのは日本国内の旅行の自由だった。いくら地の利を活かそうとしても、都市部の居留地にとどまっているだけでは、書物で読んだり人づてに聞いたりした知識を自分の目で確かめることは困難だった。収集家にとっても、手に入る美術品は自ずと限られたろう。一方、廃仏毀釈の洗礼を受けたとはいえ、寺院は依然として美術品の宝庫であり、幸運に恵まれさえすれば貴重な品物を直接手に入れることも期待できた。良質の知識を得ようとする場合でも、信用の置けない「骨董屋」にくらべれば、寺院ははるかに信頼できる好ましい場所だった。

幕府は1858年（安政5）に諸外国と修好通商条約を締結したが、このとき外国人の遊歩規定がつくられ、以来、居留地から10里（25マイル）を越える外国人の旅行が制限された。旅行目的が「健康保全」と「学術調査」に限定されたものの、1874年（明治7）にこの規定がようやく緩和され、申請者に旅券が発給されることになった。この規

制緩和によって、事実上、外国人の日本国内の旅行が自由になった<sup>7</sup>。

1870年代後半から外国人旅行者による日本の国内旅行が盛んになる。代表例に、1878年（明治11）6月に来日したイザベラ・バードの東北・北海道旅行があるが、バードの『日本奥地紀行』（1881）によれば、当時はまだ信頼できるガイドブックがなかった。しかし3年後の1881年（明治14）には、サトウとホーズの『中部および北部日本旅行案内』が刊行され、上質のガイドブックが手に入るようになった<sup>8</sup>。よく知られるようにアーネスト・サトウは1862年（文久2）に来日し、英国外交官として幕末維新を体験した。語学に堪能なだけでなく、日本の歴史と文化に造詣が深く、旅好きで健脚を誇るサトウだったから、この種の書物の編纂に彼ほどの適任者はいなかった。収集と研究を飛躍的に進め、やがては美術史の構想を促すことになる歴史的條件は、このようにして徐々に整えられた。

## 2. 外国人による奈良・京都旅行

規制緩和によって外国人の国内旅行が盛んになると、奈良と京都は、美術に関心をもつ旅行者の注目を集め始め、やがて彼らの知識欲と収集熱を満足させる格好の目的地となった。1872年陰暦3月10日（陽暦4月17日）から50日間を会期にして、京都で2回目の博覧会が開催されたが、このときはじめて外国人の入京が許された。ジョン・ブラックの『ヤング・ジャパン』第32章は、当時のようすを次のように記している。

京都において博覧会が催され、その間は外国人は非常に簡単で、僅かな制限だけで、京都を訪れることが許されるという告示が出された。同様に、彼らはまた京都付近の名所を見物することも許された……。この解禁を全開港地の多数の居留民が利用した……。彼ら

が京都から帰っての報告は、その後京都を訪れたすべての人が確証しているが、街路が整然として清潔なこと、宮殿、邸、寺院、史蹟の興味深いこと、そして近郊の美しいこと等は、国内のどの都市にもまさって、京都を、最も注目と感嘆に値するものとしている、と確信させるものがあつた<sup>9</sup>。

未知の体験を求める多くの外国人生活者にとって、京都は彼らの好奇心を満たす絶好の対象となつた。翌1873年（明治6）3月に再度博覧会が開かれると、『ジャパン・ウィークリー・メール』4月12日号に紀行文「京都とその周辺」が掲載され、博覧会に合わせて英文の『京都名所案内』が刊行された<sup>10</sup>。

1874年（明治7）の規制緩和以後の奈良、京都方面の旅行例では、1876年8月から11月まで日本に滞在したエミール・ギメとフェリックス・レガメの旅行が早い。ギメとレガメは、10月3日に横浜を出発して東海道を西へ向かい、10月16日に京都に着いた。1876年9月1日付の外務省発給のレガメの旅券「外国人旅行免状」が残されており、「旅行先及路筋」の項に伊勢、奈良、琵琶湖、京都が記載されたが、ギメとレガメは奈良旅行を果たさず帰国した<sup>11</sup>。

次に、『日本、その建築、美術および美術工芸』の著者クリストファー・ドレッサーの例がある。ドレッサーは1876年（明治9）12月から翌1877年4月まで滞在し、この間、京都、奈良を訪れた。1877年2月3日に興福寺、東大寺、正倉院を訪問し、とくに正倉院では、ドレッサーが国賓待遇を受けたためか、博物館長町田久成の案内で多くの正倉院宝物を見学した<sup>12</sup>。しかし、奈良西方の法隆寺、薬師寺、唐招提寺などを訪れる機会はなかったようだ。

1877年（明治10）2月に勃発した西南戦争は、大多数の長期旅行の計画を断念させたことだろう。戦争の終結後の例には、1879年5月7日か

ら6月10日のアーネスト・サトウの関西旅行がある。サトウは5月29日に法隆寺、薬師寺、唐招提寺、西大寺を訪問した。

同時期の有名な例に、大蔵省印刷局の得能良介とエドワード・キヨソネらによる宝物調査がある。1879年5月1日から9月19日まで5ヵ月を費やし、中部・近畿から関東一円を巡った大旅行のようすは、得能の旅行記『巡回日記』に詳しい<sup>13</sup>。これによれば、一行は6月3日に奈良に入り、正倉院では町田久成の計らいで宝物を調査し、法隆寺へはサトウより2週間ほど遅れ、6月10日に訪問した。

1879年（明治12）11月15日より翌1880年1月2日にかけて、サトウはこの年2度目の関西旅行を試みている。11月30日に大阪の造幣局でウィリアム・アンダーソンと合流し、ともに京都、奈良の寺社を探訪した。12月7日に東大寺大仏殿、興福寺、西大寺、唐招提寺、薬師寺をまわり、夕方、法隆寺に到着。翌8日の朝、法隆寺を訪れた<sup>14</sup>。

翌1880年（明治13）には、東京大学の夏季休暇を利用してアーネスト・フェノロサが関西旅行を行なった。このとき同行した岡倉天心の証言によれば、古代の名画を見るためにはじめて京都、奈良に行ったという<sup>15</sup>。1880年の旅行については、フェノロサの『東亜美術史綱』のなかでわずかにふれるだけで、その全貌は知られていない。

以上が1874年（明治7）の規制緩和以後、『中部および北部日本旅行案内』が刊行された1881年以前に行なわれた奈良、京都方面の旅行の主なものだ。これらの実体験は彼らの知識と収集品を充実させただけでなく、日本美術史の形成を促す活発な言説を生産する下地をつくった。

### 3. 法隆寺金堂壁画の記述と評価

#### (1) 法隆寺探訪

これらの旅行のなかで、法隆寺の金堂壁画はどのように記述されたのだろうか。まず、明治の

もっとも早期の本格的な宝物調査に、文部省博物館による1872年（明治5）の例がある。調査はこの年の干支をとって「壬申検査」と呼ばれ、このとき天保年間以来はじめて東大寺の正倉院が開扉されたことで名高い。調査旅行は陰暦5月27日から10月20日まで5ヵ月に及び、東海・近畿の寺社が対象になった。調査団は博物館の町田久成、内田正雄、蜷川式胤が中心となり、古物収集家の柏木貨一郎、写真師の横山松三郎らが加わった。

このときの蜷川式胤の日記『奈良之筋道』が残されており、その詳細な記述から調査の全容がわかる。奈良では陰暦8月12日から20日に正倉院の宝物調査を行ない、8月25日に唐招提寺、薬師寺、26、27日に法隆寺を訪れた。聖徳太子ゆかりの宝物類を多数収蔵する法隆寺では入念な調査が行なわれたが、金堂壁画については、堂内諸仏の簡単な記述に次いで、「堂内四方二張付ノ仏画、是又甚古シ」と述べるにとどまった<sup>16</sup>。

金堂壁画の記録の初出は1106年（嘉承1）の大江親道『七大寺日記』に遡る<sup>17</sup>。蜷川らはあらかじめ壁画の存在を承知していたとみるべきだろう。しかし蜷川の目は、壁画の「甚古シ」という側面にしか向けられていない。しかも「張付」とあるのは観察の正確さを欠く。金堂壁画への関心が希薄だったとすれば、それは、壁画自体に理由があったというより、むしろ調査の対象となった古器旧物の概念の問題だったのだろう。よく知られるように、前年1871年（明治4）陰暦5月に古器旧物保存の太政官布告があった。壬申検査はこの布告をうけて行なわれた。建物に付随した壁画はどんなに古くても、調査や保存の直接の対象になりにくかったのではないか。もとより1872年の時点では、蜷川らが金堂壁画を「美術」として認識する状況にもなかった。

その後の明白な法隆寺の訪問例は、先に述べた1879年（明治12）5月のサトウ、6月の得能良介とキヨソネの一行、そして12月のサトウとアンダーソンまで降る。ところがサトウの日記と得能

の『巡回日記』を読む限り、いずれの場合も金堂壁画の記述は見当たらない。

2年後の1881年（明治14）11月1日から17日にもサトウは関西を旅行した。このときは、来日中の英国皇太子の第1皇子アルバート・ヴィクターと第2皇子ジョージに随行して京都、奈良を案内する旅だった。一行は11月10日に法隆寺を訪れたが、この日のサトウの日記が興味ぶかい。「金堂はきれいに片づけられ、諸像も再配置されている。有名なフレスコ画もきれいにされたように見受けられる。というのも、それら〔壁画〕は以前よりはるかに見栄えがするからだ。天気の良い日にはすこぶる明瞭だ」という<sup>18</sup>。この証言は3つの点で注目される。まず、このときまでに壁画が有名になっていたこと、金堂内の諸仏の配置が変更され、壁画も手入れされたこと、そして、サトウは明らかにこれ以前に金堂壁画を見る機会があったことだ。

## (2) 金堂壁画の「発見」

アーネスト・サトウは法隆寺金堂壁画をいつ見たのだろうか。可能性があるのは、彼が法隆寺を訪問した1879年（明治12）5月29日と同年12月8日だ。とくに5月の旅行では、出発の7日の日記に「私が長いあいだ暖めてきた long-projected 大和の旅にナゴヤ丸で出帆す」とあるので、この旅がサトウにとってはじめての大和方面の本格的な旅行だったことがわかる。旅行の目的は、もっぱら『中部および北部日本旅行案内』執筆のための取材にあったことが指摘されている<sup>19</sup>。実際、「トラベリング・ノートブック」と呼ばれるノートブックがサトウの日記に登場するので（5月15、16、27日条々）、サトウが旅行記録用ノートを日記帳と別に携行していたことがわかる。

ところが、1881年（明治14）の『中部および北部日本旅行案内』の法隆寺の項には、釈迦三尊像をはじめ、金堂諸仏については詳しい記述があるものの、金堂壁画への言及はない。本書は1884

年刊行の第2版で大幅に増補改訂されたが、このとき金堂壁画の記述がはじめて登場する。1881年の初版に壁画の記述がないのは、取材の段階で壁画を目にしなかったか、あるいは目にしながらかその価値に気付かなかったか、いずれかだったと考えざるをえない。かりに1879年5月の時点で金堂壁画の価値認識があれば、まちがいでなく1881年の初版の記述に反映されたはずだからだ。

サトウが金堂壁画を認識したのは1879年12月8日の法隆寺再訪のときだったと考えるべきだろう。このときサトウに同行したウィリアム・アンダーソンが半年ほど前、日本アジア協会の会合で「日本美術の歴史」を発表したときには金堂壁画への言及がなかった。一方、1884年の『中部および北部日本旅行案内』第2版には、専門家の分担執筆による24項目の解説が序論に加えられたが、そのなかのアンダーソンによる「絵画芸術」の項では、法隆寺の金堂壁画に高い評価が与えられた。1886年の大著『日本の絵画芸術』でも金堂壁画の評価はきわめて高い。サトウとともに12月8日に法隆寺と四天王寺を訪問したアンダーソンは、翌9日にサトウと別れて船で横浜に戻り、翌1880年正月に帰国した。アンダーソンが法隆寺を訪れたのは、このときが（おそらく最初で）最後だったと断定してよい。

1879年12月8日の法隆寺再訪のときのサトウの日記には、「私は以前のノートに付け加えるべき多くのことを見出した」という興味ぶかい記述がある。このときの新知見には金堂壁画のことも含まれていたにちがいない。しかし、このときの知見は、結局1881年の初版に間に合わず、1884年の第2版に活かされたと考えるべきだろう。英国の2親王に随行したサトウの2年後の法隆寺三訪は、これらの知見を再確認する機会になったことだろう。

1884年の『中部および北部日本旅行案内』第2版の法隆寺の項目には、「〔金堂の〕壁は仏教主題の絵画で覆われている。絵画は高貴な描きかたで

制作され、彫刻家のトリ・ブッシと、同じく初期の時代の朝鮮の僧侶の筆に帰せられている。これらは日本の美術の歴史にとって並はずれた重要性和価値をもつ。それらがきわめて古いことは少しの疑いもない。かつ、スタイルそのものの卓越は、これらが朝鮮の芸術家たちの作品であるという意見を確信させる。というのも、日本の画家の手になることがわかるいかなる作よりも、これらがあるかに優れているからである」と記されている<sup>20</sup>。現在の目から見ると、壁画制作者のアトリビュートは問題となろうが、その価値認識がきわめて高いことは見過ごせない。後世の金堂壁画評価の原型をここに認めることも、あるいは可能かもしれない。

『中部および北部日本旅行案内』第2版の序章の「絵画芸術」に示されたアンダーソンの見解もこれと似ており、「さらに古代に遡る現存する絵画遺品のなかで最も疑いなきものに、法隆寺金堂の仏教の壁画装飾がある（395頁の記述）。これは607年の同寺創建のときのものであると言われている。この作は、後世の仏画一派の作品の最上のものくらべても引けをとることはあるまい。構図と彩色においては初期イタリアの巨匠の作によく似ている」とある<sup>21</sup>。2年後の1886年の『日本の絵画芸術』でもアンダーソンは同様の記述を繰り返している<sup>22</sup>。

### (3) 知識の伝達

サトウとアンダーソンは1879年（明治12）12月8日、法隆寺の金堂で、偶然にも壁画を「発見」したのだろうか。おそらく、そうではないだろう。すでに1872年の壬申検査のとき、蛭川式胤が日記に書いたように、「甚古シ」という認識が金堂壁画に対してあった。むしろ、サトウとアンダーソンには金堂壁画についての知識を事前に手に入れる機会が十分あったと考えるほうが自然だろう。

それではいつ、サトウとアンダーソンは金堂壁画の価値に気付いたのだろうか。注目されるのは、

1879年11月15日の関西旅行出発を2ヵ月ほど遡る9月27日のサトウの日記だ。アンダーソンと会ったこの日、「われわれは、日本美術の共著に取り組むことに合意した。彼〔アンダーソン〕が歴史と評論を、私が伝説と神話の部分、つまりその動機を供する。私は建築の一章も書かねばならぬが、むずかしからう。われわれは、本の刊行をボストンの本屋に依頼するつもりだ。その本屋は、アンダーソンに手紙をよこして美術記事の連載を依頼してきた。明日からは、自分の分の仕事をまじめになって進めねばなるまい」と、サトウは記している<sup>23</sup>。

サトウの評伝『遠い崖』の著者、萩原延寿が指摘したように結局は実現されなかったものの、この記事から、1879年11月の関西旅行の前に、サトウとアンダーソンのあいだで日本美術の本を共同執筆する計画のあったことがわかる<sup>24</sup>。1879年末の関西旅行は、アンダーソンにとってはもっぱらサトウとの共著のために、サトウにとっては共著と『中部および北部日本旅行案内』の改訂版の双方のために計画、実行されたと思像してよいだろう。そのため両者は1879年9月末以降、必要な情報の積極的な収集にあたったことだろう。

そこで注目されるのは、サトウと町田久成の関係だ。1879年5月の関西旅行のおり、往路の船上でサトウはモトザハという陸軍少将と知り合ったが（5月9日条）、「この人物は自分の友人である町田久成と旧知だった」とサトウの日記にある<sup>25</sup>。このほかにもサトウの日記には、町田との親しい関係を思わせる記事がある<sup>26</sup>。町田は1872年の壬申検査の中心人物のひとりで、文部省博物局の局長を務めた。日記には蝮川式胤の名前も登場するが、書きぶりから想像すると、蝮川との関係は親密なものではなかったようだ<sup>27</sup>。これに対し、町田は薩摩藩の重臣の出身だったから、幕末にフランスに対抗して薩摩藩を支持した英国外交の中核で活躍したサトウが町田と旧知の間柄だった可能性は十分に考えられよう。

1879年5月の関西旅行のときのサトウの日記には、「ヤマト・ガイド」あるいは「ガイドブック・トゥ・ヤマト」に言及した箇所がある<sup>28</sup>。明らかに、この書物は江戸時代の地誌類だ。サトウは日本語の読み書きに堪能で、古書の収集家でもあったから、取材旅行の前提として、古い書物からの知識が周到に収集、蓄積されたことだろう。だがそれと同時に、1879年9月にアンダーソンと日本美術の本の共同執筆を決めたサトウは、1872年の壬申検査など、新しい知識にも注意を払ったにちがいない。具体的な記述は日記に見当たらないが、サトウが1872年の壬申検査の知識を得たとすれば、それは町田からだった、と考えるのが自然だろう。

ここでは法隆寺金堂壁画を例にあげたにすぎないが、知識の伝達という観点から日本美術史の形成過程をながめると、たとえば、金堂壁画の知見は、町田からサトウへ伝わり、サトウから他の外国人のあいだに広まったと思像されてよい。おそらくフェノロサもサトウから直接聞いたか、あるいは第三者を介してサトウの話を知ったのではなかったか。このようにして受け渡された新知見は彼らの経験によって裏付けられ、さらに鑑賞眼によって評価、取捨選択され、やがて体系的な知識へと成長を遂げ、日本の美術史という一個の歴史の骨格がつくられたと考えるべきだろう。

#### 【註】

- 1 1870年代の著作に次の4点がある。George Ashdown Audsley, *Notes on Japanese Art*, Liverpool, 1874; George Ashdown Audsley and James Lord Bowes, *Keramic Art of Japan*, Liverpool and London, 1875; James Jackson Jarves, *A Glimpse at the Art of Japan*, New York, 1876; Rutherford Alcock, *Art and Art Industries in Japan*, London, 1878. 馬淵明子「序文：ジャポニズムとテキスト」（『復刻版ジャポニズムの系譜』第1回配本初期英語文献集成別冊付録）Edition Synapse, 1999, 4～7頁、および、馬淵明子『ジャポニズム—幻想の日本』ブリュッケ、

- 1997、16～17頁、参照。
- 2 William Anderson, "A History of Japanese Art," *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol.7, 1879, pp. 339-374.
  - 3 W. Anderson, *Descriptive and Historical Catalogue of a Collection of Japanese and Chinese Paintings in the British Museum*, London, 1886, p. VI. 原文は "This contribution was, I believe, the earliest effort made to collect and record the main facts in the history of Japanese Pictorial Art."
  - 4 Ernest F. Fenollosa, "Review of the Chapter on Painting, in L'art Japonais, by L. Gonse," *The Japan Weekly Mail*, vol.II, no.2, July 12, 1884, pp. 37-46.
  - 5 クララ・ホイットニー／又民子ほか訳『勝海舟の嫁—クララの明治日記』下（中公文庫）中央公論社、1996、236頁。
  - 6 斎藤月岑／金子光晴校訂『増訂武江年表』2（東洋文庫118）平凡社、1968、222頁。
  - 7 外国人内地旅行の規制緩和については、丸山宏「近代ツーリズムの黎明—「内地旅行」をめぐる—」吉田光邦編『一九世紀日本の情報と社会変動』京都大学人文科学研究所、1985、89～112頁、参照。
  - 8 Ernest Mason Satow & A. G. S. Hawes, *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*, Yokohama and Hong Kong, 1881. バードについては、庄田元男「解説」アーネスト・サトウ／庄田訳『日本旅行日記』1（東洋文庫544）平凡社、1992、294頁、参照。
  - 9 J・R・ブラック著／ねず・まさし、小池晴子訳『ヤング・ジャパン—横浜と江戸』3（東洋文庫176）平凡社、1970、180頁。
  - 10 K. Yamamoto（山本覚馬）, *The Guide to the Celebrated Places in Kiyoto & the Surrounding Places for the Foreign Visitors*, Kiyoto, 1873.
  - 11 尾本圭子「ギメとレガメーの日本旅行（一八七六年）」日仏美術学会編『ジャポニスムの時代—19世紀後半の日本とフランス—第2回日本研究日仏会議』日仏美術学会、1983、47～77頁。
  - 12 ドレッサーについては、郡山市立美術館／ブレン・トラスト編『クリストファー・ドレッサーと日本』「クリストファー・ドレッサーと日本」展カタログ委員会、2002、参照。奈良旅行については『日本、その建築、美術および美術工芸』（Christopher Dresser, *Japan: Its Architecture, Art, and Art Manufactures*, London, 1882）、石田為武編・高鋭一校『英國ドクトルドレッセル同行報告書』1877、および、井上章一『法隆寺への精神史』弘文堂、1994、38～45頁、参照。
  - 13 得能通昌『巡回日記』印刷局、1889。キヨソネについては、明治美術学会・印刷局朝陽会編『お雇い外国人キヨソナーネ研究』中央公論美術出版、1999、参照。
  - 14 アーネスト・サトウ／庄田元男訳『日本旅行日記』2（東洋文庫550）平凡社、1992、225～235頁。
  - 15 岡倉覚三「岡倉覚三君談」『太陽』14-14、1908、119頁。
  - 16 米崎清実『蜷川式胤 奈良の筋道』中央公論美術出版、2005、244頁。
  - 17 林良一「解説 金堂旧壁画」奈良六大寺大観行会編『法隆寺5 建築・工芸・絵画』岩波書店、1971、97～106頁。
  - 18 原文は "The *Koñ-dau* has been cleaned out and the images re-arranged. The famous frescoes appear to have been cleaned, for they are seen to much better advantage than before, and are quite clear on a bright day." 以下、サトウの日記は横浜開港資料館蔵マイクロ資料「サトウ日記」による。
  - 19 庄田1992（註8）290頁。
  - 20 Ernest Mason Satow & A. G. S. Hawes, *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*, 2nd and revised edition, Yokohama, 1884, p. 395. 原文は "The walls are covered with paintings of Buddhist subjects, executed in a noble manner, attributed to the sculptor Tori Busshi and a Korean priest of the same early period. These are of extreme interest and value for the history of art in Japan. Of their great antiquity there can be little doubt, and the excellence of the style of itself confirms the opinion that they are the work of Korean artists, for they are far superior to anything known to have been produced by Japanese painters."
  - 21 *Ibid.*, p. 92. 原文は "One of the least doubtful of the more ancient pictorial relics still in existence is the Buddhist mural decoration in the Kon-dō of Hō-riū-ji (described on page 395), which is said to date from the foundation of the temple in A.D. 607. This work will compare not unfavourably with the best of the later productions of the Buddhist school, and both in composition and colouring bears much resemblance to the work of the early Italian masters."
  - 22 William Anderson, *The Pictorial Arts of Japan: With a Brief Historical Sketch of the Associated Arts, and Some Remarks upon to the Pictorial Art of the Chinese and Koreans*, London, 1886, pp. 7 f. 原文は "One of the least doubtful of the ancient pictorial relics still in existence is a Buddhist mural decoration in the Hall of Hō-riū-ji, which is said to date from the foundation of the temple in A.D. 607, and was probably the work of



a Korean priest. It compares not unfavourably with the later productions of the Buddhist school, and both in colouring and composition bears much resemblance to the works of the early Italian masters. A tracing from the original has been recently presented to the British Museum collection by Mr. Satow.”

23 原文は“ We agreed to work on at the joint book on Japanese art, of which he furnishes the history and criticism and I the legendary and mythical part, the motives. I have also to write a chapter on architecture, which will be difficult. We are going to propose to a Boston bookseller to publish it, who has written to Anderson asking for a series of art-articles. I must proceed diligently from tomorrow at my part of the work.”

24 萩原延壽『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄 14離日』朝日新聞社、2001、62、160頁。

25 原文は“ a Majorgenl. Motozaha, a Machida related to my friend M. Hisanari.”

26 たとえば1877年7月16日、1878年2月6日条々。

27 1873年1月29日、1877年3月24、28日条々。

28 1879年5月11、28、29日条々。ピーター・コーニッキー、林望編『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録—アストン・サトウ・シーボルト・コレクション』Cambridge University Press, 1991、を参照したが、本書の特定はむずかしい。

〈付記〉本稿は2007年7月8日（於お茶の水女子大学）、お茶の水女子大学比較日本学研究センター第9回国際日本学シンポジウム「ヨーロッパにおける日本美術史の成立と発展—フランス及びイギリスの主要な日本美術コレクションの果たした役割—」の発表原稿を加筆訂正したものである。席上、多くの有益な教示を受けたが、本稿に活かすことができなかった。後日の課題としたい。